

紹介

戸田芳実編

『日本史(2)中世1』

本書は有斐閣新書『日本史』全10巻の中の、平安・鎌倉を扱ったものである。近年、さまざまな形式・体裁による『日本歴史』の企画が氾濫しているが、その中でも本書はその視角の新しさと水準の高さから、最も注目されるべきものの一つである。

日本中世をめぐる学説が、種々に分裂・並立し、一種の停滞をもたらしている現在、従来の研究では見落とされていた側面をも含めて、中世社会の総体を多面的にとらえ直す試みがなされようとしている。このシリーズの編集方針である「できるだけ具体的な素材にそくして、歴史における『場』を重視する視角」は、本書においても適確に対象をとらえ、新しい歴史的諸事実の発掘に一応の成功を収めている。当然ながら、問題の立て方自体も、政治・経済・文化といった一般的な立て方ではなく、研究史を

ふまえた上での配慮が見られる。章立ては次のようになっている。

序章 初期中世史の見方について(戸田芳実)

1章 京都の成立(黒田絃一郎)

2章 国衙と領主(坂本賞三)

3章 騎兵と水軍(高橋昌明)

4章 中世民衆の形成(井上寛司)

5章 荘園村落の景観(金田章裕)

6章 鎌倉と関東(杉橋隆夫)

7章 中世寺院の生態(田中文英)

8章 東西交通(戸田芳実)

このように問題を立てた意図は、序章で戸田氏が解説しているから、そちらを参照していただくとして、以下若干の感想を述べて紹介にかえたい。

本書では1章「京都の成立」、6章「鎌倉と関東」の二章が、都市史をとりあげているが、都市の発展・変貌を主権のあり方や政治過程などと結びつけて考察するという方向は、律令制下の都城を国家権力のあり方という視角からとらえようとしている。古代史との接点も求められようし、中央都

市と地方とを結ぶ諸幹線交通の実態をとらえた8章「東西交通」における視角も、地方政治社会と都城との関わりを究明しようとしている最近の古代史の研究動向とも共通項が見出されて興味深い。

また3章「騎兵と水軍」は、「在地領主」という概念ではとらえきれない、弓馬の術をもって他と自らを区別した特殊な芸能人としての武士という、武士の職業的戦士としての実体に着目したものである。船や武器の解説もわかりやすく、武士の姿が叙述の中で、極めて明瞭な形をもって浮び上がってくる。2章「国衙と領主」における国衙支配下での在庁官人・神主・郡司といった在地領主の位置づけとともに、中世成立期の領主の多面的なあり方が浮き彫りにされて面白い。

5章「荘園村落の景観」も現在の歴史地理学の成果を知るうえで絶好のものといえよう。村落景観・土地利用形態・灌漑施設など、文献史料からだけでは十分明らかにできない問題を、地割形態や微地形条件などを最大限に活かすことによって解明して

いる。歴史地理学の方法など、教えられる点が非常に多い。

中世民衆の固有の存在形態とその歴史的特質を論じた4章「中世民衆の形成」は、本書の中でも、中心にすえられるべきものであるが、後半部分の記述がやや平板になってしまったのは惜しまれる。たとえば「個別小経営の成立」あるいは「小経営の自立」などと言われる場合、もう少し具体的な事例での肉づけが欲しいところである。7章「中世寺院の生息」も、寺院内部での問題から一歩踏み出して、寺院と民衆のかわりを意欲的に論じた好編である。

以上の通り、本書は平易な叙述ながら、高度な内容を新しい視角から豊富な事例に基づいてえがいており、種々の企画が多いわりには、適切な入門書に恵まれない現在において、サークルなどのテキストとしても好適であるといえよう。

(新書判 二五〇頁 一九七八年九月
有斐閣 五六〇円)

(水野章二 京都大学大学院生)

D. E. Queller,

The Fourth Crusade

第四回十字軍といえば、周知の如くコンスタンティノープルを征服した十字軍であるが、本書はその発端よりラテン帝国の建設に至る過程を、ほぼ事件経過の順に従って叙述したものである。

構成は一章とエピローグよりなっており、第一章はインノケンティウス三世による召集より備船交渉使節の出發まで、第二章はヴェニスにおける契約締結の次第、第三章はボニファース・ド・モンフェラの選出事情とヘゲナウでの所謂「三者密談」を巡る問題、第四章は十字軍士のヴェニス集結と人員不足による財政的窮乏、第五章はザラ征服に至る経緯、第六章はザラ協約締結を巡る紛糾、謝罪使派遣と教皇の対応、小アレクシウスの到着とコンスタンティノープル行の最終的決定、第七章はコルフ島出發よりガラタの塔占領まで、第八章は第一次コンスタンティノープル占領、第九章はアレクシウス四世の戴冠と国内巡幸、ラ

テン人とギリシア人の対立激化、第一〇章はアレクシウス四世帰還からアレクシウス五世による殺害まで、第十一章は第二次コンスタンティノープル占領を、それぞれ扱っている。

エピローグでは、占領後の概観とラテン帝国の弱体性、一二六一年の再征服への展望を述べ、最後に、第四回十字軍による征服と「一四五三年」との関係について論じている。それによれば、ビザンツの弱体化はこの事件とは関わりなしに進展していたのであり、一方、十字軍による破壊からの復興は順調であったという。その際、二〇世紀におけるドイツや日本の復興が例に挙げられており、広島をコンスタンティノープルに喩えていることなど、最後の頁に来て驚かされるが、固よりこれはレトリックと言うべく、実際には必ずしも不自然な印象を与える程ではない。著者はこの問題についてそれ以上の詳論をしていない。

序文において著者も主張している如く、本書は、より広いバースペクティヴの中に位置づけるといふ試みをむしろ積極的に避